

神戸・南京をむすぶ会（於／神戸学生青年センター）
紙芝居劇場のお知らせ（TEL 078-851-2760）
2008.9.10（水）18:30

【棺桶で寝た私の18歳】

— 戦争は心を鬼に変える —

原作：森田とよ子（南京従軍看護婦）
演出：久保恵三郎（元日本映画監督協会員）
出演：劇団「シャロンの花」

★ 梗概 ★

太平洋戦争中、日赤を卒業した森田とよ子さんは赤紙一枚で従軍看護婦となり、南京陸軍病院で次々戦病死していく兵士たちの地獄を共にします。不眠不休の勤務と悪夢を見るような組織悪が18歳の青春を鬼のように変えていきます。戦後65年を迎えようとする時、その怖さ実態がリアルな絵と共に紙芝居に写し出されていくのです。平和の大切さを確かめ合うために。



寝た私の十八歳



南京第一陸軍病院 伝染病棟の医師・看護婦・衛生兵



★ 戦時の生き証人として

「今回の日赤・島根班の上田政子様のお便り。敗戦の中でお別れしてから何年なりましようか？ただ驚きと懐かしさが込み上げています。『つながれた人』や『ピー家』などの思い出が一つに繋がりがもうびっくり。何やら不思議な喜びで一杯です。皆さんから優しくして戴いて体調もよろしく、これも久保様始め神戸・南京をむすぶ会の皆様のお励ましのお蔭、神様のお力かと有り難く心に染みています。」

「私は早85歳になりました。若い時は戦争で、戦後は食糧難などドン底生活に耐えて生き延びたのに、戦後64年も経ってまだ苛められる世の中が情けないです。昨年和歌山女囚刑務所を訪問し、年老いた囚人が多いのに驚きました。常習万引きが多く狙いは食品です。収入が少なく一人暮らし医療費が払えない。安い老人ホームは満員。他は高く手が回らない。やはり刑務所が安心な老人ホームになってしまうのです。今回の後期高齢者医療制度は今までの保険を取り上げ、はよう死ぬ」と言わんばかりの中身です。」

「私は車椅子生活ですがまだまだやる事があります。昨年戦争の生き証人として体験記を出しました。それが紙芝居になりました。」

多くの人に読ん戴き、又見て戴きたいと思えます。昔話としてでなく、現在とどう結び付き、どうしたら戦争をなくせるかを、考えてほしいのです。「私には名誉も地位もお金もない。どんなに権力に睨まれても生命以外は失うものは何もない。そう考えると嬉しくなり死ぬまで戦争反対を叫び、不正な事にははっきりNOと言う生き方をしたいと思っています。私たちの目線での小さな出来事、願いを大切に一人一人が声を上げ声を広げ、共同しましょう。それが憲法を暮らしに生かす道なのです。紙芝居もいろいろある所いろんな声で叫ぶことでしょう。」

《美原九条の会 森田とよ子》

上田政子さんが森田さんと勤務した南京第一陸軍病院跡。



揚子江上流、シャーカーン波止場

南京大虐殺跡地であり、敗戦間際には多数の傷病兵が送られてきた。

